

宗祐寺の仏涅槃図について

中野 玄三

一 はじめに

奈良県宇陀郡榛原町大字萩原に所在する融通念仏宗宗祐寺には、三幅よりなる珍しい仏涅槃図がある。この作品の概要については、すでに日本国宝全集第三四輯に解説されているが、昭和五年一月に京都国立博物館で開催された特別陳列「涅槃図の名作」で精査する機会に恵まれたので、その基礎的な諸点をできうるかぎりくわしく紹介し、この作品のもつ意義について考察を加えてみようと思う。

二 賛について

この仏涅槃図はまったく特殊な例というべく、一般の仏涅槃図と相違する点がきわめて多い。まず、一般の仏涅槃図が仏伝中の一つとして描かれる場合を除き、仏涅槃図として独立して制作される場合には、すべて一幅の図であるのに対して、これは三幅で構成され

ている点が注目される（挿図1）。そして、その左右両幅の上部に色紙形を設けて、ここに賛を書き、三幅とも会衆の名を明らかにする短冊形を付けている点も、資料的にも重要な意義をもつ。賛をもつ涅槃図の例としては、奈良達磨寺の平安時代後期の作品があり、賛は書いてないが色紙形をもつ例として、福井劍神社の鎌倉時代後期の八相涅槃図がある。また、短冊形を付ける例としては、和歌山金剛峯寺応徳三年本、京都興聖寺宝徳三年本等があり、達磨寺本は短冊形を設けず、画面に直接名を墨書している。現在する仏涅槃図の膨大な量を考えれば、賛と短冊形を付ける例は稀というべく、仏涅槃図の古様を示す一表徴といえるであろう。

この賛と短冊形の名称でも、またこの仏涅槃図は特色がある。まず、右幅（図版一、資料二）の賛は、色紙形を淡朱地と緑地の二区に分ち、前者に六行、後者に約九行ほど書く。後者は緑青のため絹地の断爛甚しく、解読が難しい状態だが、その内容の概要は、「大般涅槃経云」として、釈迦が拘尸那城西を去る五里余、跋提河の西辺娑羅林七宝林において、二月一五日夜半、右脇を下にして、北を枕に西を向いて横たわり、涅槃に入ったことを記す。その七宝林をあら

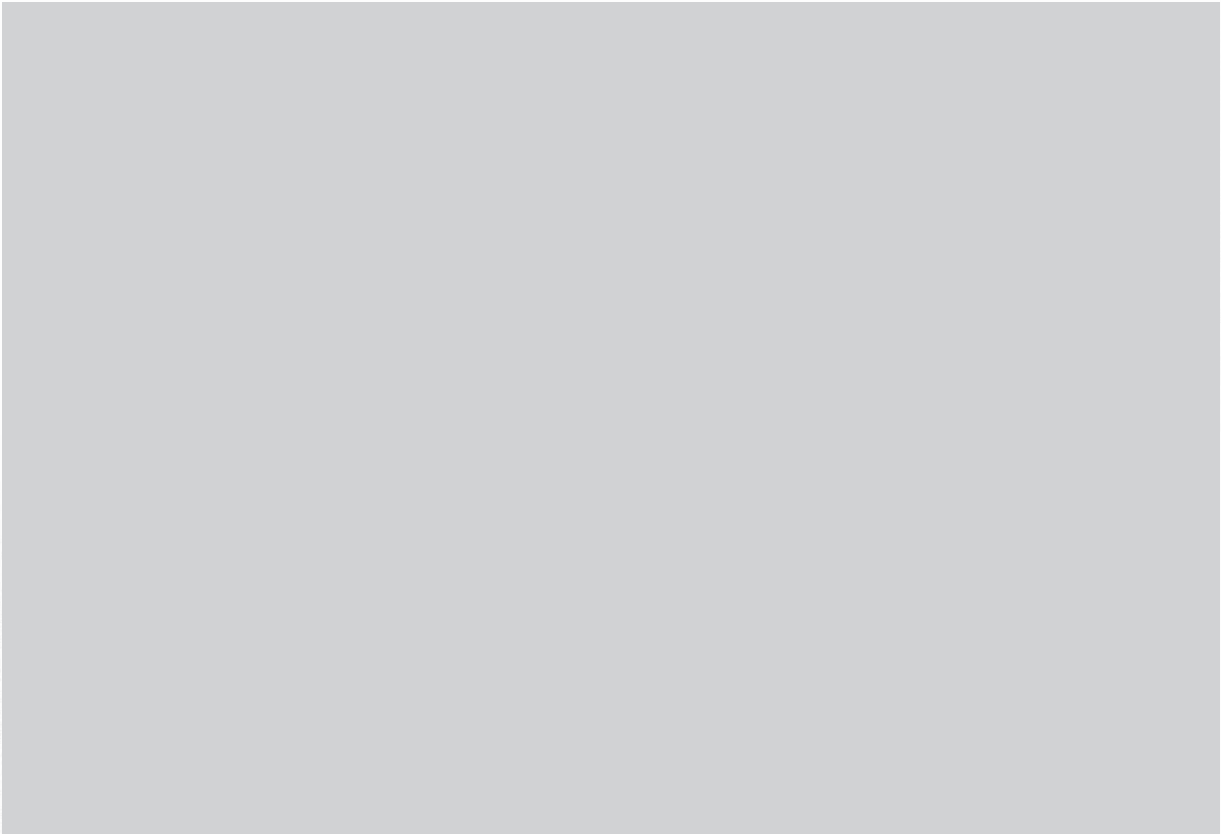
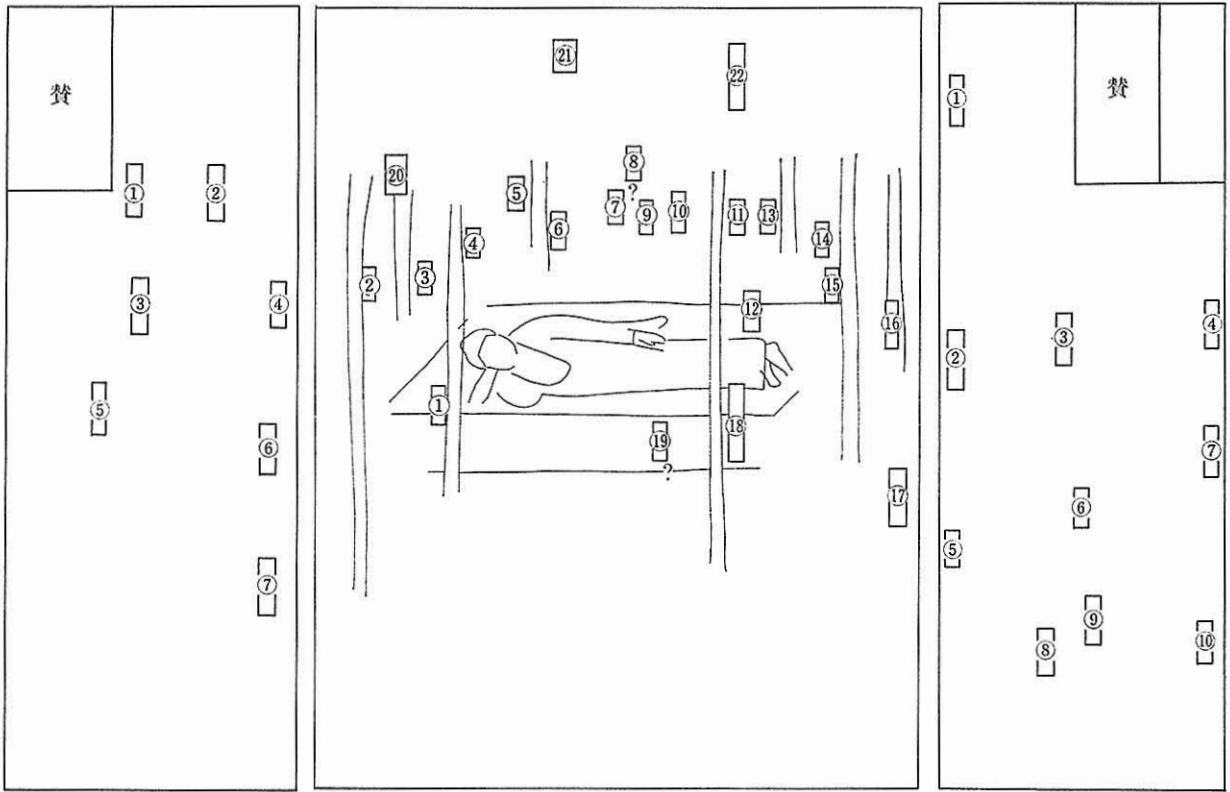


插图 1 仏涅槃図 宗祐寺



付図 3

付図 1

付図 2

わすためか、八本の娑羅樹の幹には輪宝のような同心円の半円形文が描かれている。もっとも変っているのは、それに続く四双八隻の娑羅樹林の描写で、双林とは、樹分上合の故にかくいうのだとい、四方の双樹を次のように青白に色分けして名称を付けている。

東方（仏後） 青色―常樹 交白―無常樹^{Over}
南方（仏足） 青色―樂樹 白色―無樂樹
西方（仏前） 青色―我樹 白色―無我樹
北方（仏頭） 青色―淨樹 白色―無淨樹

曇無讖訳大般涅槃經（大正一―三七五）のこの部分をみると、その卷第三〇師子吼菩薩品第一の一の四に、

善男子 以是因緣故 我於此娑羅雙樹大師子吼 師子吼者名大涅槃 善男子 東方双者 破於無常 獲得於常 乃至北方双者 破於不淨 而得於淨 善男子 此中衆生 為双樹故 護娑羅林 不令外人 取其枝葉 斫截破壞 我亦知是 為四法故 令諸弟子 護持佛法 何等名四 常樂我淨 此四双樹 四王典掌 我為四王 護持我法 是故於中而般涅槃 善男子 娑羅雙樹 花果常茂 常能利益 無量衆生 我亦如是 常能利益 声聞緣覺 花者喻我 果者喻樂 以是義故 我於此間 娑羅雙樹 入大寂定 大寂定者 名大涅槃

とあり、東方と北方の二方の双樹しかとりあげない省略形になっている。しかし、隋章安頂法師撰唐天台沙門湛然再治の大般涅槃經疏卷第一（大正三八―一七六七）序品上には、

樹者下文云 東双表常 南双表樂 西双表我 北双表淨 又双茂表常 陰涼表我 華以表淨 果以表樂
とあり、四方を常樂我淨に配当していることを明らかにしている

る。その青と白に色分けすることについては、大般涅槃經卷第一壽命品第一に、

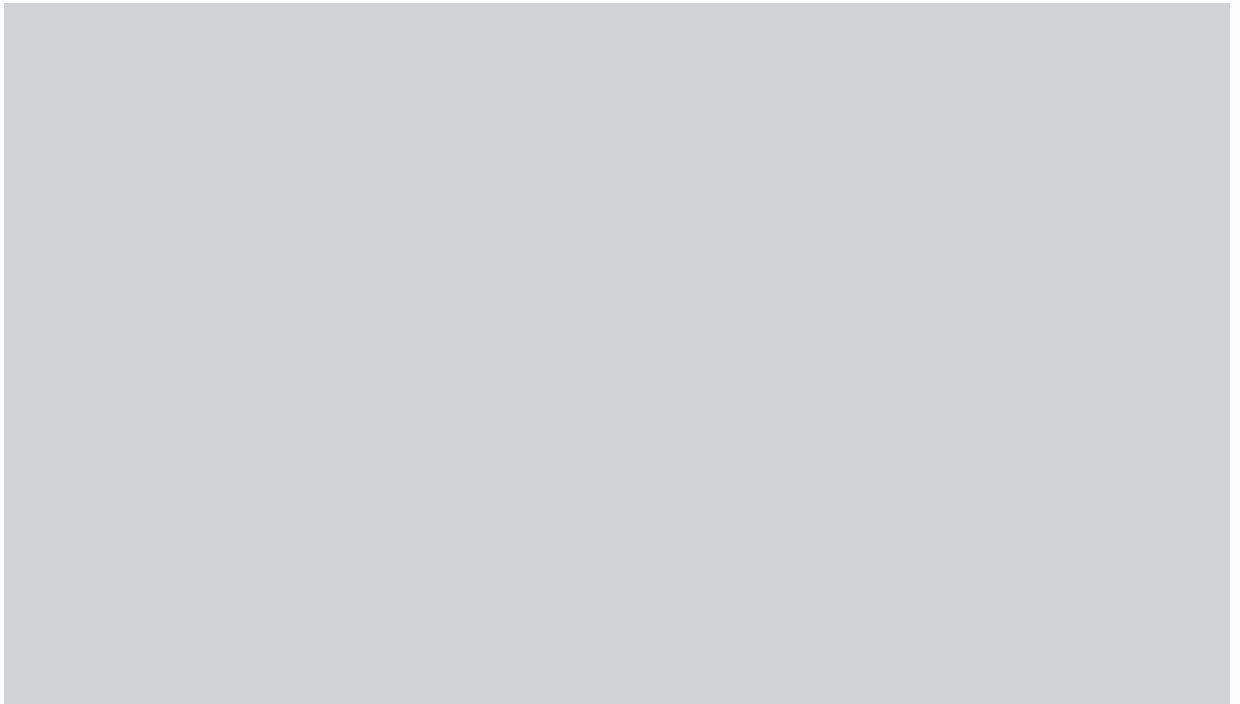
爾時拘尸那城娑羅雙林 其林交白猶如白鶴
とあり、大般涅槃經疏卷第一序品上には、

娑羅雙樹者 此翻堅固 一方二株 四方八株 悉高五丈 四枯四榮 下根相連 上枝相合 相合似連理 榮枯似交護 其葉豐蔚 華如車輪 果大如餅 其甘如蜜 色香味具 因茲八樹通名一林 以為堅固

とあるので、さらにくわしくその四枯四榮を敷衍して、青白の色分けになったものと思われる。右幅の贊に「大般涅槃經云」と書いてあるが、実際にはこれに該当する句は大般涅槃經にはない。また、図をみると、後世の涅槃圖のように、釈迦の枕辺の二双を青、足辺の二双を白としたらしく、贊の四方それぞれ青白相對するのとは違っている。その点に贊と図様との不一致があるようである。

次に左幅の贊（図版二、資料二）をみると、下地の色紙形に八行の贊があり、その末尾に、「事在小涅槃經 〔不能繁圖之矣〕と割注を入れているので、右幅の贊が大般涅槃經によっているのに対して、左幅の贊が小涅槃經によっていることがわかる。

内容は釈迦の涅槃を知った仏母摩耶夫人が、切利天から飛来して歎くところを記しているが、不思議に思われるのは、摩耶夫人に釈迦の入涅槃を知らせに行く仏弟子が、摩訶摩耶經が説く阿那律ではなく、優婆離としている点である。この仏弟子を優婆離とする經典に仏母經（大正八五〇二九一九）がある。これは大英図書館所蔵のスタンブリッジ集燉煌写本の一つで、尾欠のわずか五百数十字しかない偽經の断片である（挿図2）。



挿図2 仏母経 大英図書館

この経は、まず、使者として派遣した仏弟子を優婆離とし、また、その前夜子時に摩耶夫人が六種の悪夢をみたという二点で、この贊の内容と一致している。さらに、経に摩耶夫人が優婆離を聖人と呼び、優婆離の様子を「顔容頹頓 面色無光 状似怯人」と述べているのは、贊に同じく聖人と呼び、「形容憔悴、面無精光、唇口乾燥、全無威徳」とあるのにあたり、摩耶夫人が涅槃のことを聞いて悶絶躡地したとき、経に二天女が「将水嚙之」とあるのも、贊に諸天姝女が「冷水灑面」とあるのに一致するのである。両者が遂語的に一致しないのは、仏母経系の他の経典に拠ったからだとも考えられるが、あるいは、贊にする場合に改めたのかもしれない。このような偽経の小涅槃経に拠って贊を書いたことは、また、この仏涅槃図の種々の特殊性を裏付けることになるであろう。

三 中央幅の短冊形の名称について

中央幅(資料三、付図二)の短冊形に書いてある名称と金剛峯寺本のそれとを比較すると次のようになる。参考のため、短冊形はないが画面に直接墨書している達磨寺本の名称も付記しておく。

金剛峯寺本	達磨寺本	宗祐寺本
慈氏菩薩 地藏薩埵 無辺身菩薩 高貴徳王菩薩 普賢大士 文殊大聖	(絵絹剝落か、像あり) 普賢 文殊	置圓菩薩 文殊師利大聖

觀自在菩薩 釈提桓因 副王 緊羅那 摩睺羅 薄俱羅 劫賓那 阿那埵 侍者阿難 難陀比丘 仏子羅雲 迦留陀夷 須菩提 富楼那 迦旋延 優婆離 周梨槃特 俱絺羅 離波多 解僞陳那 威徳無垢称王 善徳優婆塞 毘舍離城大臣長者 後宮夫人 須跋達羅 純陀眷属 純陀子 優婆塞純陀 尸棄梵王	觀自在菩薩 釈提桓因 副王 緊羅那 摩睺羅 薄俱羅 劫賓那 阿那埵 侍者阿難 難陀比丘 仏子羅雲 迦留陀夷 須菩提 富楼那 迦旋延 優婆離 周梨槃特 俱絺羅 離波多 解僞陳那 威徳無垢称王 善徳優婆塞 毘舍離城大臣長者 後宮夫人 須跋達羅 純陀眷属 純陀子 優婆塞純陀 尸棄梵王	薄俱羅 劫賓那 迦旋延 優婆離 解僞陳那 純陀 尸棄梵王
---	---	--

阿難
羅睺羅
須菩提
迦旋延
優婆離
摩訶拘絺羅
離波多
純陀
(短冊形なし、像あり)

宝台周辺と摩耶夫人を
迎へて行くところと二
回描かれる。

耆婆大臣 迦葉童子 摩耶夫人 勝音天子 (他に「南方 双樹」と書 いた短冊形 がある。)	耆婆 摩耶夫人 勝音天子 (名称不明のもの) 菩薩 一 天部 一 仏弟子 六 俗人 一	摩耶夫人 (名称不明のもの) 飛天 二 仏弟子四 阿闍世王 達長者 跋陀 王
---	--	---

この表を種類別にわけると次表のようになる。

金剛峯寺本	7	4	14	13	その他
達磨寺本	4	1	11	6	金剛力士1・獅子1
宗祐寺本・中央幅	2	0	11	6	飛天2・侍女2・金剛力士・ 迦陵頻伽・獅子・象・虎・猿 ・牛(?)・鹿・猪・兔・羊・ 犀・亀・鷲鳥・鴛鴦(番)・鸚 鵡(?)・鶺鴒・雉・山鳥

この表によってわかることは、宗祐寺本は宝台の周囲に配置された会衆の数が、平安時代の金剛峯寺本や達磨寺本などより少なく、菩薩のごときは二体しか描かれず、むしろ、下方の動物を増加させるとともに、中央幅で減少した菩薩と天部と俗人を、左右両幅に大量に描いていることである。これはこの仏涅槃図の大きな特色にあ

げられよう。

宝台の周囲に配置された会衆のうちで、とくに注目されるのは、宝台右手前にひざまづく阿闍世王を描くことである。ところが、阿闍世王については、大般涅槃経巻第一に、
爾時復有毘舍離王 及其後宮夫人眷属 閻浮提内所有諸王 除阿闍世并及城邑聚落人民
とあり、阿闍世王は涅槃の場にいなかったことになっている。宗祐寺本はこの点にまた一つの特色を認めることができる。

仏涅槃図で摩耶夫人を描く例はすこぶる多いが、古い作品では、東京国立博物館本・金剛峯寺本涅槃経後分巻上見返絵・新薬師寺本・石山寺本・京都国立博物館本等のように、摩耶夫人を描かない例が多い。また、描く場合でも、摩耶夫人は坐像に描かれ、同じく坐像で童子形の勝音天子と相対すること、金剛峯寺本・鶴林寺本(板絵)・達磨寺本のごとくである。ところが、宗祐寺本では、二人の侍女を従えた立像の摩耶夫人が登場し、それを迎えに靈芝雲に乗って昇天する優婆離が描かれる点で、古い形式の涅槃図から逸脱している。また、宋元画の影響を受けて発生した新しい形式の涅槃図では、摩訶摩耶経によって、摩耶夫人を迎えに行く仏弟子を阿那律として描くらしいことは、玄奘の大唐西域記巻第六の記事でもこれを阿那律として描くことによって傍証されよう。この点でこの仏涅槃図は前後の涅槃図とまったく孤立しているといわなければならない。しかも、この優婆離はまた会衆中にも配置されているので、この図には同図異時法が介在していることになる。これは八相涅槃図を除けば、おおむね単一の場面を描くことが多い日本の仏涅槃図にとって、珍しい形式といえるであろう。

この珍しい形式は釈迦の姿にもあらわれている。釈迦を載せる宝台は、古い形式によくあらわれるように、釈迦の足の方、すなわち右方の側面をあらわす形に構図され、釈迦は右脇を下にし、両膝をまげることなく、まっすぐのばして横臥する。これに対して、金剛峯寺・鶴林寺両本では仰臥する姿勢、達磨寺本では横臥する姿勢、石山寺本では手枕を外して宝台の縁に右手をさしのべる姿勢をとる。その姿勢は一定しないようだが、手枕する例は、この宗祐寺本が現存最古の作品といえるであろう。そして、手枕する釈迦は、宋元画の影響を受けた新しい形式の仏涅槃図にいたって一般化するものである。

そのほか、釈迦の足許にたつ娑羅樹林の間を二体の飛天が舞い、王（金剛峯寺本に従えば威徳無垢称王か）と短冊形に記されている俗人が釈迦の足に手を触れ、枕辺に斜めに錫杖をたてかけ、これに鉢を入れた包みを下げていることなど、数えあげればこの涅槃図の変っている点は限りがない。

飛天が舞う他の例として石山寺本と浄教寺本、菩薩坐像が飛雲に乗る例として、東京国立博物館本と浄土寺本がある。このうち、宋元画の影響を受け、しかも当麻曼荼羅の形式に従ってその周辺に仏伝を描いている浄土寺本を除けば、これらの仏涅槃図は樹林の上空を舞う飛天の例である。それは宝祐寺本のように樹林の間を縫って舞う飛天とは多少違うかもしれないが、概して、飛天が舞う形式は古いといえよう。そのなかにあつて、とくに樹林に密接して樹林神としての性格を暗示する宗祐寺本の形式は、本来あるべき姿を留めているのかもしれない。

釈迦の足に手を触れているのは、長阿含経（大正一一）巻第四遊

行経によれば、

大迦葉適向香積 於時仏身 従重槩内 双出両足 足有異色 迦葉見已 怪問阿難 仏身金色 是何故異 阿難報曰 向者有一老母悲哀而前手撫仏足 涙墮其上 故色異耳 迦葉聞已 又大不悦とあるように、老婆であり、釈迦が入棺後、両足を棺外に出したのは迦葉に対してであった。興聖寺本の短冊形によれば、この老婆は毘舍利城老女といい、新しい形式の涅槃図によく描かれている。宗祐寺本のように、釈迦の足に手を触れている人が、王と呼ばれる例は他に知られていない。

さて、ひるがえって、この仏涅槃図の画風をみると、長年月の酷使による画面の朽損甚だしく、顔料の剝落もいちじるしいものと思われるが、この画風の大きな特色は、濃彩画ではなく、もともと、描線を主にした絵と称することができよう。その描線は、金剛力士や動物に鋭い筆致の描線もみられるが、概して、肥瘦のない細く穏やかな描線に終始している。このような描線による表現のなかで、宝台をとりまく菩薩には、その秀麗な面相に一種の緊張がただよい、優婉な金剛峯寺・達磨寺両本のごとき平安時代後期の仏涅槃図に比べて、鎌倉時代前期の理智的な気分がよくあらわれているが、一方では、仏弟子たちの描写に、唐の羅漢画を和様化したような古い表現が根強く残っている様子がみられる。この点は俗人たちと動物の表現でも同様で、総じて、全体に大和絵的な画風が支配的で、宋元画の画風はまったく見られないといっている。

このような画風の特徴と、釈迦や摩耶夫人の形式からみて、宗祐寺本は新古画形式の入りまじった例で、両形式の中間にあり、抛るべき儀軌に迷い、混乱しているときの所産であると考えられることも

きよう。しかし、左幅が仏母経系の偽経によって贊を書いている点や、阿闍世王・樹林神のごとき飛天・釈迦の足に手を触れる王など、他の仏涅槃図から孤立したような諸人物の登場は、この仏涅槃図の成立について、大きな問題を示唆しているように思われる。

四 左右両幅の短冊形の名称について

左右両幅の存在は、宗祐寺本を特徴づける最たるものであろう。ところが、ここに描かれている諸像がなんであるかは、短冊形の文字がほとんど滅失している関係で、その説明はむずかしい。いまかろうじて読めるものや、大般涅槃経によって推定できるものをひろってみると、次のようになる。

まず右幅(資料四、付図二)には、上から、大和絵式の穏やかな平行曲線を重ねた波の上を雲に乗って飛来する①「帝釈眷属等」、波のすぐ下には、左に②「諸仏世界菩薩」、中央に③「 鬼王」、右に獅子冠を戴いた④「緊那羅王」、そのすぐ下に男女の⑤「諸龍王等」、その左下に男女の⑥「諸王夫人」、さらにその左下に、頭頂を剃った垂髪の男一人と尼二人よりなる⑦「比丘尼阿羅漢」、最下段には、左に、六道絵を思わせるような二頭の鬼⑧が坐り、うち一頭は赤い皿を捧げる。その右に、頭に紐を巻き、布製の角を二つ立てた異様な容貌の男、肩まで垂れる赤頭巾で大きな後頭部を包んだ男、草鞋をはいたやせ赤鬼⑨が坐り、右端に、二髻を結ったやせ男の⑩「諸神仙人」が片膝をつく。これらはほとんどが中央幅に向かつて合掌し、涅槃の場に参集した会衆であることを示している。

左幅(資料五、付図三)に目を転じると、怪魚二頭が出没する大和絵

式の波の上、最上部に、雲に乗って飛来する右①「四方風神」と左②「主雲雨神(雷神?)」、波のすぐ下左に、③「法界処 \square 等」と注する驚頭冠をかぶり尻から尾羽を出した怪物と、肩まで垂れる赤頭巾をかぶり、赤帯で鉢巻した人頭鳥身の怪物、すこしはなれて右側に、三体の④「諸羅刹等」、その下左に、四天王らしい着甲の四天部⑤、右に三人の⑥「諸天女等」、最下段には、全身に緑衣をまとった男一人と、白頭巾に鉢巻して拍手足踏みする上半身裸形の男四人⑦を描いている。最下段を除けば、ほとんど中央幅に向かつて合掌する姿で、これも涅槃の場に参集した会衆であることを示している。

さて、これらの会衆について、大般涅槃経ではどのように記述されているのであろうか。大般涅槃経巻第一に登場する会衆を列挙し、左右両幅および中央幅に描かれた諸像に該当するものを拾ってみると、次のようになる。(中央幅にあるもの――、左右幅にあるもの \square)

- 無量諸大弟子 (除摩訶迦葉・阿難――ただし、宗祐寺本はじめ諸比丘等皆阿羅漢 六十億 \square 比丘尼等一切亦是大阿羅漢 一恒河沙 \square 菩薩摩訶薩 二恒河沙諸優婆塞 三恒河沙諸優婆夷 四恒河沙大耶離城諸離車等男女大小妻子眷属及閻浮提諸王眷属 五恒河沙大臣長者 六恒河沙毘舍離王及其後宮夫人眷属閻浮提内所有諸王 \square (除阿闍世并及城邑聚落人民) 七恒河沙諸王夫人(除阿闍世夫人) \square 八恒河沙 \square 諸天女等 \square 九恒河沙 \square 諸龍王等 \square 十恒河沙 \square 諸鬼神王 \square 二十恒河沙金翅鳥王 三十恒河沙乾闥婆王 四十恒河沙緊那羅王 \square 五十恒河沙摩睺羅伽王 六十恒河沙阿修羅王 七十恒河沙陀那婆王 八十恒河沙 \square 羅刹王 \square 九十恒河沙樹林神王 千恒河沙持呪王 一億恒河沙貪色鬼魅 百億恒河沙天諸姪女 千億恒河沙 \square 地諸鬼王 \square 十

万億恒河沙等諸天子及諸天王〔左幅⑥〕 四天王等 十万億恒河沙等〔左幅⑥〕 四方風神 十万億恒河沙〔左幅⑥〕 主雲雨神 二十恒河沙大香象王 二十恒河沙

等師子獸王 二十恒河沙等諸飛鳥王〔鳥〕 雁 鴛鴦 孔雀 乾闥婆鳥 迦蘭陀鳥 鳩鵲 鸚鵡 俱翅羅鳥 婆嚩伽鳥 迦陵頻伽鳥

耆婆耆婆鳥〔右幅⑦〕 二十恒河沙等水牛 牛 羊 二十恒河沙等四天下中

諸神仙人 一切蜂王 諸山神 阿僧祇恒河沙等四大海神及諸河神〔右幅⑦〕

積提桓因 三十三天 大梵天王及余梵衆 欲界魔王波旬与其眷屬〔右幅⑦〕

諸天姝女 大自在天王 無辺身菩薩 諸仏世界諸大菩薩〔右幅⑦〕 (除毒蛇

視能殺人蛻蝮蝮蝎及十六種行惡業者)

以上の結果、右幅ではつきりしないのは、③ □ □ 鬼王・⑧ □ □

神および⑨の三種である。③の二鬼王はおそらく千億恒河沙地諸鬼

王に該当するのであろう。⑧と⑨の鬼神に該当しそうな会衆とし

て、十恒河沙諸鬼神王・七十恒河沙陀那婆王 千恒河沙持呪王 一

億恒河沙貪色鬼魅 諸山神 阿僧祇恒河沙等四大海神及諸河神 欲

界魔王波旬等をあげることができよう。なお、②の三体の菩薩は中

央幅の釈迦に従う文殊・普賢二菩薩に対して、諸仏から涅槃の場に

派遣された諸菩薩をあらわすものと思われる。

左幅ではつきりしないのは、③ 法界処 □ 等と⑦の二つである。③

は二体とも人頭鳥身の怪物で、鳥頭人身の迦樓羅とは別らしく、こ

れも鬼神の類であろうが、現在短冊形に残っている文字からみて、

大般涅槃経にはこれに該当するものがない。鬼神の類が多いことで

は、宗祐寺本は松永記念館金棺出現図と似ているが、その表現法は

この例のようにおおむね一致しない。⑦の舞踏し拍手する六人の俗

男がなにをあらわしているのか、これも不明というほかなく、涅槃

の場面にはふさわしからぬ行動といえよう。以上左右両幅あわせて

一七群の会衆のうち、大般涅槃経巻第一に登場する会衆と一致するのは十二群で、残り五群のうち、その解明のため別の根拠を求めなければならぬものが二・三ある。これは中央幅の問題と一括して考察する必要があるように思われる。

五 結 語

宗祐寺仏涅槃図は、その三幅をもって構成される点といい、摩耶夫人を迎えに行く仏弟子が優婆塞である点といい、将又、会衆にさまざまな天部・鬼神・俗人を登場させる点といい、稀有の作品と称することができよう。その典拠になった経典は、左幅の色紙形によれば、摩耶夫人に関する事跡が小涅槃経に拠ったことを明らかにしている。その小涅槃経と称するのが、一般に用いられている摩訶摩耶経ではなく、偽経仏母経系の小涅槃経であった。一方、右幅の色紙形によれば、釈迦の入涅槃、とくに娑羅双樹に関して、大般涅槃経に拠ったことを明らかにしている。しかし、この仏涅槃図三幅に描かれた多くの会衆のうちには、北涼の曇無讖の訳した大般涅槃経(大正二―三三七四)・宋代沙門慧嚴等依泥洹経加之と注した大般涅槃経(大正二―三三七五)・東晋の法顕が訳した大般泥洹経(大正二―三三七六)などでは、理解できない会衆が多く描かれていること前述のとおりである。このようにみてくると、摩耶夫人の事跡に関して偽経仏母経系の経典を典拠にしているように、右幅の賛にある大般涅槃経も、現在すでに失われてしまった未知の経典である可能性がでてくる。これがこの珍奇な仏涅槃図の制作された大きな理由であったらうと思われるが、この大般涅槃経および仏母経系の小涅槃経が

日本に請来されなかったことも考えられるので、この仏涅槃図には、この図の原本になった大陸の粉本があったのではないかと想像される。その粉本が中国のどの時代の作品であるかは軽々に断言しがたいが、釈迦や仏弟子の表現に和様化の進んだあとを示していること、中央幅の跋提河をあらわすさかまく波が、肥瘦をほとんど交えぬ古様な線で描かれ、左右両幅の波にいたっては、まったく大和絵のそれであること、四天王がいちじるしく肥満した重厚な体軀に表現されていることなどから、宋元画であるよりも、むしろ唐末五代あたりの仏涅槃図にその粉本を求めたい。

それはあたかも、日本に請来された両界曼荼羅に不空系と善無畏系とがあるように、何種類かの仏涅槃図が日本に請来されたのである。そして、金剛峯寺本すら大般涅槃經の經説に決して忠実でないことからみても、大陸においては、各種の仏涅槃図が制作されていたものと思われる。宗祐寺本はそのうちの一形式を今に伝えているのであろう。

もちろん、この十三世紀前半の制作と思われる仏涅槃図が、粉本の形式を忠実に伝えていると考えるのは無理で、いちじるしい和様化のため、当初の姿が大幅に改められていることは認めなければならぬであろう。それにしても、類品のまったく知られていないこの仏涅槃図の存在は、まことに貴重というべきである。今後の研究によって、この類を絶した珍しい仏涅槃図に関する新しい資料、とくにこの本の典拠になった大般涅槃經が発見されることを期待して、今回は以上の紹介にとどめようと思う。

●資料 一

(右幅色紙形賛)

一代教主釋迦大師 以本願力 出生穢土 化緣圖畢 大般涅槃經云
 物尸那城西去五里餘 有跋提河 々々西邊有娑羅林 如来入滅処也
 二月十五日夜半 臨涅槃時 於七寶林 右脇而臥 頭枕北方 足指南方
 面向西方 後背東方 於其中夜 入涅槃畢 謂雙林者 四方各雙□□
 雙林云樹分上合故曰雙 娑羅樹林 四雙八隻 東方一雙在佛後□□
 青色名常樹 一樹交白 名無常樹 南方一雙在佛足 一樹青色□□

(墨界線)

樹□□名無常樹 西方一雙在佛前 一樹青 名我樹 一樹白 名無我樹
 北方樹一雙在佛□□青 名淨樹 一樹白 名無淨樹 各□西 皆悉一
 枯□也 榮□□淨枯 喻正名無榮□我無淨白色表□來榮
 □青色者 如来□如来於□入涅槃表非枯非榮 榮□假
 □如 南 青 樹
 □益 如 取 成□章□

●資料 二

(左幅色紙形賛)

如来^{仰臥}雙林 告諸大衆 ^{吾今}因痛 欲入涅槃云々 如来告弟子
 優婆離 汝昇天 報吾母 令知^{摩耶}夫人在忉利天 忽昨夜
 子時 得六種^惡夢說 夢未訖 乃見夜入優婆離 夫人問云 聖人々々
^何因形容憔悴 面無精光 唇口乾燥 全無威德 不^並尋常 優婆
 離嚶咽 報言佛母 々々三界大師 忽於昨夜子時 入般涅槃故遣
 我 來報母令知 夫人聞說此語 悶絕躡地 諸天姝女 冷水灑面
 良久方寤 即將^徒衆^變飛至雙林所云々 夫人大喚言 ^建達
^建達 ^吾是汝母 汝是吾子 今既捨我 入涅槃□
 事在小涅槃經 不能繁錄之矣

← 下地 白色 →

← 下地 緑地 → → 下地 淡朱地 →

●資料三

(中央幅短冊形墨書)

- 1、須菩提 2、文殊師利菩薩 3、優婆塞 4、羅睺羅
 - 5、普賢菩薩 6、摩訶拘絺羅 7、 8、 ？該当する像なし
 - 9、 10、 11、 12、迦旃延 13、離婆多 14、阿難
 - 15、 王 16、須達長者 17、 跋陀 18、阿闍世王 19、 短冊形ないか
 - 20、波離昇切利 21、摩耶夫人 22、諸飛天
- 天報告摩耶 從天來下

●資料四

(右幅短冊形墨書) 内は大般涅槃經によって補う。

- 1、帝釋眷屬等 2、諸佛世界菩薩 3、 鬼王 4、緊那羅王
- 5、比丘尼阿羅漢 6、諸王夫人 7、諸龍王等 8、 神
- 9、 10、諸神仙人

●資料五

(左幅短冊形墨書) 内は大般涅槃經によって補う。

- 1、主雲雨神 2、四方風神 3、法界處 等 4、諸羅刹等
- 5、四天王等 6、諸天女等 7、

●資料六

(中央幅裏面貼付紙墨書)

(その1)(上)

記

吾祖父師道祐 萩原村愛宕山
 不動堂寺住持中 同境内
 山地四反二畝余歩 杉檜ヲ植
 置 是ヲ道意ニ讓ル 道意是ヲ

受テ當山住持トナル 道意死後

道順相續也 依之 道意曾テ愛

念セシ本幅ノ為 道祐以來我ニ

伝持スル社寺ノ山林立木ヲ以

当涅槃像修覆料并ニ道意

追善供養資トシテ 當山林ヲ此

像幅ニ附置者也

元禄十六年未十二月八日

不動堂寺現住

権律師道順

(その2)(中右)

唐繪涅槃像三幅一對之内

和州宇陀郡萩原之庄

不動堂常什物

寄付之施主

和州高市之郡

小槻村道意

(その3)(中左)

夫世尊慧明之月 没翳乎沙羅雙林 慈尊之会暎 猶逸

焉也 于時支那梵竺之像末等紹興釋謨八教準矩 唯

法三世三諦之遺旨 特燈焰于其中間 古今有之 應倫

而獲畫圖 此體相使群衆歸仰也 覲彼雖癡癡而

魄骸之小渠 偏了 因々果々之復報 繞施于瞬眩不停

其業轍也 仏般尔之由基云 先載高市之道意者

寄靠后 遽失其所在者数年 是圖一純和而以

今也天保七之曆丙申春三月 於當郡長峯村里

再正獲是図焉 故衆贖于諸禱 以賽于諸舊麻

予就而加筆 記其拓輩之姓名云爾

舜善生(朱文) (白文)

(その4) (下)

施主連名

川口屋兵七

住吉屋萬兵衛

小林 逸仙

篠埜屋茂七

龜屋 與助

宇陀屋又兵衛

同 喜右衛門

同 喜八郎

萬屋 久兵衛

金物屋喜兵衛

八木屋喜七

比布屋和助

油屋 二郎兵衛

八木屋又四郎

鍛冶屋喜作

紺屋 喜工門

宇陀屋善藏

金物屋九兵衛

辻 長助

世話人

金物屋善兵衛

玉立屋卯八

篠野屋茂七

同 武兵衛

釋 林幢

(なお、(その2)と同文同筆の貼紙墨書が左右両幅にもある。)

法量 (単位cm)

中央幅 縦一二二・二 横九二・八 二副一鋪

右幅 一二三・七 四四・三 一副一鋪

左幅 一二三・一 四四・四 一副一鋪